

26	京都府八幡市立八幡小学校 外11校	20～22
----	-------------------	-------

平成22年度研究開発報告書（要約）

1 研究開発課題

効率的で効果的な指導方法の研究開発
 ～基盤技術の定着とシティズンシップ教育の研究を通して～

2 研究の概要

本市では、学校ユニバーサルデザイン化構想のもと、「豊かな市民力」「しなやかな身体力」「確かな学力」の調和のとれた育成を図ることによって、「人間力」を身に付け、「自分を磨き、やわたをつくる」子どもたちを育てていきたいと考えている。

本研究では、モジュール学習を取り入れた「総合基礎科」とシティズンシップ教育の理念に基づく「やわた市民の時間」を導入すれば、人間力の育成において「効率的で効果的な指導」ができるとの仮説を立て検証している。

新設した総合基礎科では、「確かな学力」の定着のために、学習の基盤となる「読み・書き・計算」などを確実に定着させるモジュール学習の在り方を研究している。

また、「豊かな市民力」「しなやかな身体力」の育成のために、小中9年間の系統的なコア・プログラムと、各教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間を横断的に関連させたサブ・プログラムを合わせたシティズンシップ教育の在り方を研究している。

3 研究の目的と仮説等

(1) 研究仮説

「確かな学力」の定着を図るためには、学習の基盤技術を確実にすべての子どもたちに身に付けさせることが必要である。この基盤技術の定着は、従来は授業や宿題などの家庭での学習の中で行っているが、現行の教科標準時数では毎日、国語、算数（数学）、英語の授業を行うわけではなく、また、本市の場合、家庭での学習に全面的に期待できる状況にもない。

本研究では、このような状況を踏まえ、次のような3つの下位仮説を設定している。

- 短時間であれ毎日繰り返し学習をする方が、効率的で効果的ではないか。
- 小学校においては、国語、算数から年間17.5時間をモジュール学習に活用しているが、本来、国語、算数に与えられている時間を削っても、基盤技術の定着によって、学習時間の減少を補い、結果的に国語、算数の学力が身に付くのではないか。
- 「スピード・テンポ・タイミングによる繰り返し学習」「音読による脳の活性化」「DS（携帯ゲーム機）等ICT機器の活用」「100マス計算」等の取組は、単調な繰り返し学習によって失いがちな子どもたちの学習意欲やモチベーションの維持に効果があるのではないか。

「豊かな市民力」「しなやかな身体力」の育成については、従来から教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間などで取り組んできている。豊かな市民力やしなやかな身体力に関する意識（価値）は道徳で、知識は主に社会科や保健で、スキルは特別活動等で指導してきているが、それぞれの別々の学習となり、その統合は児童や生徒各自に任されていた。意識・知識・スキルは子どもたちの中で統合され、豊かな市民力やしなやかな身体力に育つだろうという暗黙の仮説のもと、カリキュラムが構成されていたのではないか。このような思いから本研究ではシティズンシップ教育の導入の

下位仮説として次のように設定している。

- 「豊かな市民力」「しなやかな身体力」としてのシティズンシップ教育は、「意識」と「知識」と「スキル」を分解的に学習するのではなく、コア・プログラムである「やわた市民の時間」を中核に、その他の取組や活動をサブ・プログラムとする統合的な構成によって効率的効果的に育成できるのではないか。

(2) 教育課程の特例

市内すべての小中学校において2つの新設教科「総合基礎科」「やわた市民の時間」を設置する。

ア 総合基礎科

新学習指導要領の移行も踏まえ、小学校では「総合基礎科」の年間35時間と教科学習である国語と算数の各17.5時間をモジュール学習として取り組み、合わせて年間70時間、10分のモジュール学習を週程表に位置付け毎日2コマ行う。中学校では、「総合基礎科」において年間70時間、同じく10分のモジュール学習を週程表に位置付け2コマ行う。

授業時数については、小学校では標準時数を超える時数と「総合的な学習の時間」から、中学校では標準時数を超える時数と「選択教科」「総合的な学習の時間」から充当している。

イ シティズンシップ教育

シティズンシップ教育については、本市独自のコア・プログラムとサブ・プログラムという複線型のプログラムを開発し、コア・プログラムについては、新設教科「やわた市民の時間」において各学年で年間10時間程度取り組み、サブ・プログラムについては、横断的なプログラムを従来の教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間等と関連付けて行う。

授業時数については、小学校では「生活科」「総合的な学習の時間」から、中学校では「総合的な学習の時間」から充当している。

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

ア 「総合基礎科」の取組

	月	火	水	木	金
総合基礎①					
1					
2					
3					
4					
昼食					
総合基礎②					
5					
6					

* 小学校「朝・昼」パターン

	月	火	水	木	金
総合基礎①					
総合基礎②					
1					
2					
3					
4					
昼食					
5					
6					

* 小学校「朝」パターン

	月	火	水	木	金
1	総合基礎①				
	総合基礎②				
2					
3					
4					
昼食					
5					
6					
7					

* 中学校パターン

新設教科「総合基礎科」1コマを10分として、学校の実情を踏まえ毎日2コマを設定した。特に中学校においては1校時を20分として、2教科もしくは3教科の学習を行った。

指導形態は、小学校の場合は、学級担任が中心となり実施し、中学校では学年教師を中心とした学校体制で指導にあたった。

教材については、参考図書を見本とした自作教材を使用している。また、必要に応じてICT機器の活用やリズムを取るための楽器等を活用する場合もあった。

児童生徒には、①言語的基盤技術（漢字力・英単語力等）②数理的基盤技術（計算力等）の観点で評価し、通知票を通じて保護者にも通知した。

具体的な学習内容は以下のとおりである。

【小学校】

- 国語
 - ・暗唱や音読等を中心にしたリズム・テンポのある活動的な学習
 - ・漢字の書き取りや文法のプリント学習、DSの活用

- ・メモ力の向上をねらった聞き取り練習
- ・新聞記事を読んで、自分の意見や感想をまとめる学習
- 算数 ・百マス計算等計算力向上とスピードアップをねらいとした学習
- ・面積の公式、単位換算、図形の性質などの基本的例題を徹底習得（学年の学習段階に応じて取り組む）
- その他 ・社会科、音楽、外国語活動等における基本用語等の暗唱や音読全般を通して、ICT機器の活用

【中学校】

- 国語 ・小中学校で学ぶ常用漢字全ての漢字、熟語の読み書きの徹底反復学習
- ・メモ力の向上をねらった聞き取り学習
- 数学 ・正負の数、方程式や関数、因数分解等の基礎計算力のスピードアップ 百マス計算
- ・ゲーム的な要素をもった数学的な考え方を伸ばす問題演習
- ・図形の中の基本的例題を徹底習得（学年の学習段階に応じて取り組む）
- 英語 ・重要な英単語や英文のディクテーションによる反復学習、DSの活用
- ・基本構文の徹底音読と筆記による学習
- ・説明文や対話文等の聞き取り

イ 「シティズンシップ教育の研究」の取組

本市では、シティズンシップを発揮するための必要な能力として、3つの観点「意識」（思う）＝「社会の中で、他者と協働し能動的に関わりをもつために必要な意識」、「知識」（わかる）＝「公的・共同的、社会的、経済的分野での活動に必要な知識」、「スキル」（できる）＝「多様な価値観で構成される社会に参加するために必要なスキル」を大切にしている。

さらに、3つの観点に合わせて、目指す子ども像として「シティズンシップ教育の10のビジョン」を策定し、このビジョンを共通の子ども像として捉え、計画策定とともに指導にあたる共通理解を図っている。

シティズンシップ教育の3つの視点と10のビジョン

- ④社会の規範、ルール・マナーを理解している子ども
- ⑤民主主義に必要な権利や義務を理解している子ども
- ⑥経済や金融の意味や意義とキャリアデザインについて理解している子ども
- ⑦ユニバーサルデザインについて理解している子ども



シティズンシップ教育の推進にあたっては、コア・プログラムとサブ・プログラムという複線型のプログラムを開発し、コア・プログラムにおいては、年間 10 時間のシティズンシップ教育のエッセンスを、サブ・プログラムにおいては、横断的なプログラムを従来の教科・領域等と関連付けて行っている。

コア・プログラムは、「ルール・マナー」「民主主義」「経済・キャリア」「ユニバーサルデザイン」の4つの観点に整理している。その上に、小中一貫して9年間でシティズンシップ教育を推進することを大切に、それぞれの観点に従って、小学校低学年、小学校中学年、小学校高学年、中学校1年、中学校2年、中学校3年の発達段階に応じた6つのプログラムを作成している。それぞれのプログラムでは、テーマ、学習内容、評価の観点、配当時間を明らかにし作成された指導案を基本にしながら、学校の実態に応じた指導を行っている。

サブ・プログラムは、従来から取り組んできた内容においても、シティズンシップ教育のねらいと合致するものも多いため、シティズンシップ教育の視点から、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間等の内容を見直し、横断的にプログラム化したものである。校外学習や人権学習、体験学習、児童生徒会活動、食育・命の学習、学校行事全般などの取組をシティズンシップ教育の視点から、ねらいを整理し、「意識」「知識」「スキル」との関連を明らかにし、評価規準を設けながら取り組んでいる。

各時間の評価については、「意識」「知識」「スキル」の観点による評価であり、どのテーマ、どの時間においても授業者が共通して指導できるものとしている。

評価規準を「向かう (towards)」「ちょうど (at)」「超える (beyond)」とし、「意識」「知識」「スキル」のそれぞれの観点においては、3段階に応じた評価規準を策定している。指導者は、どの時間においてもこの評価規準に基づき、「ちょうど (at)」をコア・プログラムやサブ・プログラムの指導の目標として設定し、指導を行っている。

	向かう (towards)	ちょうど (at)	超える (beyond)
意識	関心をもとうとしている。	関心をもち、自ら関わろうとしている。	関心をもち、他者と協働して関わろうとしている。
知識	基本的な事柄を理解しようとしている。	課題に関する事柄を理解している。	知識を活用して、他者に分かりやすく説明している。
スキル	自分の意見を言おうとしている。	他者の意見を受け止めてから、自分の意見を言っている。	他者の意見を認めつつ、自分の意見を言っている。

(2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ○各小・中学校において、前年度の成果や課題に基づき、系統立てたカリキュラム(国語、算数・数学、英語)を作成して、モジュール学習の定着を図り、効果的な研究実践の深化を図る。 ○UD化構想実現に向けた新設教科設置の研究 ○授業研究会、研究開発校への視察及び研究会への参加 ○学力テスト等を随時実施し、その定着を図る。 ○定期的な学力向上プロジェクトに関する担当者会議を開催し、小・中の連携を図りながら、指導方法を検討する。 (情報交換による取組の工夫・改善を図る。) (年度末会議では研究のまとめを行い、課題を明確にする。)

第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ○各小・中学校において、モジュール学習のカリキュラム(国語、算数・数学、英語)を改善して、効果的な研究実践をさらに深める。 ○授業研究会、研究開発校への視察及び研究会への参加 ○学力テスト等を実施し、その定着を図る。(前年度との比較検証) ○担当者会議において、成果と課題の検証を行う。 ○重点校におけるシティズンシップ教育の推進 ○シティズンシップ教育の課題整理
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> ○シティズンシップ教育の実施 ○モジュール学習の充実・発展 ○研究発表会の実施

(3) 評価に関する取組

	評価方法等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ○実態把握のため児童生徒を対象としたアンケート調査の実施 ○各種学力診断テストの実施により、効果測定 ○学校関係者評価の実施 ○モジュール学習における研修会を実施し、教員による授業評価を実施 ○各種会議において、課題交流及び次年度への課題の明確化
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ○各種学力診断テストの実施により、学力面での効果測定 ○指導方法・授業形態等について教員による自己評価の実施 ○前年度の学校関係者評価を踏まえた自己評価の実施 ○学校関係者評価の実施 ○一年次に加え、その他必要な内容や方法について評価 ○保護者・児童生徒を対象に学校満足度調査(アンケート)の実施 ○各種会議において、課題交流及び次年度への課題の明確化
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> ○各種学力診断テストの実施により、学力面での効果測定 ○指導方法・授業形態等について教員による自己評価の実施 ○学校関係者評価の実施 ○学校関係者による評価を参考にした内部評価の実施 ○やわた版シティズンシップ教育における評価規準の作成と評価 ○次年度以降の実践に向けての評価・研究の実施

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

ア 「総合基礎科」の取組

- (ア) 様々な定量評価により、漢字や英単語などの語彙力や計算力など一定の成果は表れている。
- (イ) モジュール学習の学習内容や指導方法は、各校の児童生徒の実態に応じて工夫してきたが、効果的なものは担当者会での交流や参観により、市全体に広げることができた。
- (ウ) 学校全体で同じ時間に取り組むことで、児童生徒の意識の中に他のクラスの学習状況が刺激となり、学習意欲の喚起に繋がっている。また、教師間の交流も進めやすく指導方法や学習内容の充実に繋がっている。
- (エ) 児童生徒の意識調査によると、小学校4年生から中学校1年生までは半数以上の児童生徒が集中力が身に付いたと回答しており、モジュール学習は集中力を身に付ける効果が期待できる。
- (オ) 計算力や語彙力などが身に付いたと実感している児童は、半数を超えており、そのことが達成感、自信、自己肯定感等の情意面により影響を及ぼしている。
- (カ) 教師の意識調査によると、「授業内容が容易に定着するようになってきた」「モジュール学習に関連する単元では容易に定着するようになってきた」と感じており、モジュール学習が教科指導により影響を与えることになっている。

イ 「シティズンシップ教育の研究」の取組

- (ア) 平成 20 年度にサブ・プログラム、平成 21 年にコア・プログラムを作成したが、各校はこの指導計画及び指導案を基本形として、児童生徒の実態に合わせた各校の指導計画及び指導案を作成することができた。
- (イ) 小中 9 年間の系統性を考えた指導計画が作成でき、実践を通じて小中連携が充実してきている。
- (ウ) シティズンシップ教育が「意識」「知識」「スキル」の 3 つの観点で構成されていることについて、教員は肯定的な回答をしている。児童生徒にとって、意識・知識・スキルの面で個人によって捉え方の差はあるものの、『やわた市民の時間』で学習したことを機会に「自分の言動に対する意識」・「知識を取り入れ、多様な角度から物事を捉え、解決しようとする事」・「肯定的に話し合いを進める技術」等において変容が見られる。
- (エ) 共通の評価規準を作成したことで、テーマや教材は変わっても、指導者がシティズンシップ教育でねらう目標を絶えず意識しながら、授業展開をすることができるようになった。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

ア 「総合基礎科」の取組

- (ア) 中学校の 2 年、3 年生において、「モジュール学習が楽しい」「モジュール学習で学力がついた」「モジュール学習で集中力が身に付いた」「モジュール学習は他の授業にも役立った」と回答している割合が低く、中学校における学習内容や指導方法を研究する必要がある。
- (イ) モジュール学習により基盤技術の定着には一定の成果が見られるが、そのことが国語や算数・数学、英語などの学力にどう繋がっているか検証する必要がある。
- (ウ) 総合基礎科は、毎日 20 分 (10 分×2 コマ) 小中学校とも取り組んでいるが、この時間設定や校時における位置付けについて、このような構成が効果的なのかどうか研究する必要がある。
- (エ) DS を含め、ICT 活用をさらに進める必要がある。

イ 「シティズンシップ教育の研究」の取組

- (ア) コア・プログラムとサブ・プログラムの指導計画を作成したが、この指導計画がどの程度、有効であるかどうか、発達段階にあっていのか、時間配分はこれでよいのか等、小中連携を大切にしながら継続的に実践するとともに、様々なデータを蓄積して検証作業を続ける必要がある。
- (イ) 現時点では、「意識」「知識」「スキル」の 3 つの観点で評価規準を作成して、授業ごとの評価を行ってきたが、この評価を積み重ねながら、「シティズンシップ教育の 10 のビジョン」に基づく評価をどう行うのか、児童生徒の変容をどう把握していくのか、今後検討していく必要がある。
- (ウ) 「意識」を高め、「知識」を確かなものとし、さらに「スキル」を身に付ける授業をいかに展開するか、公開授業や研究授業を設定し、小中の教員の連携の中で、指導方法の工夫・改善をさらに行う必要がある。
- (エ) 効果的・効率的なシティズンシップ教育を推進するためには、家庭・地域をまきこんだ教育を展開することが求められる。本市が進めるシティズンシップ教育の趣旨を保護者に理解してもらえよう積極的に授業参観を行ったり、学校だより等でねらいを伝えていくことが必要である。また、児童生徒が様々な地域行事に参加することを通して、自ら住んでいる地域について考えることはシティズンシップ教育の視点からも重要なことである。そのため、地域に対してもシティズンシップ教育の取組について発信することが求められる。

八幡市各小学校 教育課程表（平成22年度）

平成22年度

	各教科の授業時数													総合的な学習の時間	新設教科			総授業時数	
	国語	国語モジュール	社会	算数	算数モジュール	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	道徳	特別活動		外国語活動	総合基礎	モジュール		教科〔再掲〕
第1学年	標準時数	272			136		102	68	68		102	34	34						816
	時数	255	17		119	17	92	68	68		102	34	34						850
							-10												34
																			34
第2学年	標準時数	280			175		105	70	70		105	35	35						875
	時数	262.5	17.5		158	17.5	95	70	70		105	35	35						910
							-10												35
																			35
第3学年	標準時数	235	70		175	90		60	60		90	35	35		95				945
	時数	217.5	17.5	70	158	17.5	90	60	60		90	35	35		60	10	35	35	955
															-35	+10	+35		10
																			35
第4学年	標準時数	235	85		175	105		60	60		90	35	35		100				980
	時数	217.5	17.5	85	158	17.5	105	60	60		90	35	35		60	10	35	35	985
															-40	+10	+35		5
																			35
第5学年	標準時数	180	90		175	105		50	50	60	90	35	35	35	75				980
	時数	162.5	17.5	90	158	17.5	105	50	50	60	90	35	35	35	60	10	35	35	1010
															-15	+10	+35		30
																			35
第6学年	標準時数	175	100		175	105		50	50	55	90	35	35	35	75				980
	時数	157.5	17.5	100	158	17.5	105	50	50	55	90	35	35	35	60	10	35	35	1010
															-15	+10	+35		30

* 小学1, 2年は、生活科より10時間をシティズンへ、3年～6年は総合的な学習からシティズンへ

八幡市各中学校 教育課程表（平成22年度）

平成22年度

	各教科の授業時数										道徳	特別活動	選択教科	総合的な学習の時間	新設教科		総授業時数	
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術・家庭	外国語	総合基礎					モジュール			
第1学年	標準時数	140	105	140	105	45	45	90	70	105	35	35	0~15	50~65			980	
	時数	140	105	140	105	45	45	90	70	105	35	35	0	25	10	70	1020	
															+10	+70	40	
第2学年	標準時数	105	105	105	140	35	35	90	70	105	35	35	15~50	70~105			980	
	時数	105	105	105	140	35	35	105	70	105	35	35	35	25	10	70	1015	
															+10	+70	35	
第3学年	標準時数	105	85	140	105	35	35	90	35	105	35	35	45~105	70~130			980	
	時数	105	105	140	105	35	35	105	35	105	35	35	70	25	10	70	1015	
			+20												+10	+70	35	

* 総合的な学習の時間より、10時間をシティズンへ